

円徳寺第八回 『教行信証に学ぶ会』 (令和三年二月)

講師・延塚知道先生

《講義一》

はじめに

皆さん、こんにちは。こういう時期にこんなにたくさん来ていただきまして、心から敬意を表します。少し体調を崩しておりまして、声がちよつと出にくいので、お聞き苦しいかもしれませんが、一生懸命がんばってお話をしたいと思います。

先回から親鸞聖人の『教行信証』の「教の巻」ですね。「教の巻」は『大経』の「出世本懐の文」、それがほとんどの内容になります。ですから「教の巻」に『大経』の発起序にある「出世本懐」の文を親鸞聖人が引用しておられますから、その文章を皆さんと拝読しているところです。

皆さんは仏教を勉強してこられたと思いますけれども、まあ法話も大事なのですが、法話は聞いてもすぐに忘れてしまうでしょう。法話も大切なのですが、親鸞聖人のお書きになったものに直接触れていただきたい。それが一番の願いです。それは、今度また開いて読むと、忘れていることを思い出します。それから何度も何度も読んでみると、それが身にしみこみます。そんなふうにして、本当に力になるのは、やはり親鸞聖人のお書きになったものをきちつと読んでいくことです。それが本当の力になっていきます。「読んでいく」と言っても、ここの皆さんは学者になるわけではありませんので。

大学院の博士くらいになりますと、例えば「出世本懐の文」は、私たちが所依にしている『大経』(『仏説無量寿経』康僧鎧訳)があるね、

それから異訳の古い『大阿弥陀経』(『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』)、

それから『平等覚経』(『仏説無量清浄平等覚経』)、

それから『莊嚴経』(『仏説大乘無量寿莊嚴経』)、

それから『如来会』(『無量寿如来会』)、

五つあるわけですから、博士くらいになると、その五つの經典の出世本懐の文章を全部抜き出してきて、どこがどう違うか、親鸞聖人が所依にしている『大経』(康僧鎧訳)はどうなっているか、というようなことを詳しく勉強するわけです。

ここでそれをやると皆さんはシャッターを閉めて寝てしまいますので(笑)、そこまではしなくても、しかし親鸞聖人がここで何を言いたいか、親鸞聖人が私たちに何を伝えたいか、

それは一言で言えば、「救いとはこういうものだ」ということを言いたいのです。それは学者であろうとお百姓さんであろうと関係ない。「人間であれば必ずこれに遇って、このように救われるのだ」ということを伝えたいわけで、それを中心にしなから、しかし皆さんと一緒に文章に当たりながら読んでいこうと思っているわけです。

この間から出世本懐の文を、だいたい半分くらいお話をしたと思います。今日は残りの半分と、できたらあとの引文がどんなふうになっているか、それを話しできればと思います。最後までお話できなくても、またこの次、少し補足して次に進めたらと思っております。

出世の大事

どうですか、休みの時にそこを少し読みましたか？（笑）。若干何名かが「はい」と言ってくれましたけど（笑）。なかなかいい文章ですからお読みになるといいと思いますよ。まあ、あまり時間ありませんけれども、何も読まずにいくというわけにもいかないの、まず出世本懐の文章を皆さんと一緒にゆつくり読んでみましょう。

聖典（東聖典）で申しあげますと百五十二ページになりますが、「**何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば**」。こういう親鸞聖人の**徴起**の言葉から始まります。

※徴起（ちようき）：音から真宗学で使われている言葉です。まねき起こすという意味で、「これから出世本懐の文を引きます」という意味ですが、ここ以外に『教行信証』で徴起の文が置かれている所はありません。（延塚先生のコメント）

これも申しあげましたが、「出世の大事」ということは出世本懐のことです。お釈迦様が何のためにこの世に出てきたかということを表す言葉です。この「出世の大事」という言葉が頻繁に出て来るのが『法華経』です。親鸞聖人は、ここで「**何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば**」と、こういう言葉を置いていきますけれども、普通、大きな大乘仏教の視野からすると、『法華経』が出世本懐経だというのが常識ですから、「そうではなくて実は『大経』が出世本懐経なのですよ」ということを言うために、わざわざ『法華経』の言葉をここに持つてきていると思つてください。

「何をもってか、**出世の大事なりと知ることを得るとならば**」、こういう徴起の言葉を置いて、『大無量寿経』に**言わく**と、こんなふうに『大経』につなげていくわけですね。このへんに親鸞聖人の、非

常に、どう言ったらいいか、自信というか、大乘仏教の出世本懐経は『大経』の他にはない、そういう自信がここによく表れているわけです。そして、『大無量寿経』に**言わく**とあつて、

「今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻覩せず、殊妙なること今のごとくましますをば。ややしかなり、大聖、我が心に念言すらく、「今日、世尊、奇特の法に住したまえり。今日、世雄、仏の所住に住したまえり。今日、世眼、導師の行に住したまえり。今日、世英、最勝の道に住したまえり。今日、天尊、如来の徳を行じたまえり。去來現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何がゆえぞ威神の光、光いまし爾」と。」
だいたいここまでお話をしてきていたと思います。

親鸞聖人の読み替え

『大無量寿経』に**言わく**とあつて、『大経』の発起序の引用なのです。が、これは、もともとは、私の聖典ですと七ページに『大無量寿経』の「発起序」が出てきます。よく注意をしないと分からないのですが、よく注意をしてみると親鸞聖人は読み替えをしています。

もともとの『大経』は、
「今日、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします。」、丸（。）ですね。そして

「明らかなる淨鏡の表裏に影暢するがごとし。」、丸（。）ですね。そして

「威容顕曜にして超絶したまえること無量なり。」、丸（。）。
こういう文章なのです。

ところが親鸞聖人の引用は『大無量寿経』に言わく、今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。こう言うふうにつながってしまっているでしょう。

本当は「。」で切っている文章を、親鸞聖人は切らないで「光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。」というふうに、切らないで続けてしまっているわけです。これを切っていくとどういうことになるかというと、「素晴らしいお姿をしたお釈迦様がいました。そしてそのお釈迦様の智慧は鏡を貫くように優れていました。そのお釈迦様が衆生に説法をして、そして『大経』を説いていく」と。こういうふうには、ある意味で言えば客観的な表現で過ぎていくわけです。

ところが親鸞聖人のように切らないで続けていくと、それは阿難が感動した内容が変わっていくわけです。客観的にそういう人がいたということではなくて、実は、「光顔魏魏と輝いて、光明無量・寿命無量と輝いているお釈迦様がいた。それに私は感動したのです。」というふうには、阿難の感動に読み替えていつているわけです。分かりますね。

救われた人が仏にする

私たちが仏教を頭で考える時には、素晴らしいお釈迦様がいて、そのお釈迦様が説法をして衆生を救うのだと、こんなふうを考えてしまうわけです。ところが実際の仏教はそうではなくて、いくらお釈迦様が優れているように、「私は仏である」と言おうが、あるいはこのように出世本懐をもし述べたとしても、それによって救われた人がいなければ仏ではありません。それは分かりますね。それに

よって本当に救われた人がいなかったら仏ではない。

ですから親鸞聖人は、観念の仏教ではなくて、実際に救われた阿難の感動に変えてしまっている。「光顔魏魏とまします」お釈迦様の感動。そして「光明無量」「寿命無量」とお釈迦様の教えが私を光として包んだ。そういう感動に変えてしまっている。そこに親鸞聖人の実際の仏教があります。分かりますかね。つまり、はっきり申しますと、凡夫として救われた阿難がお釈迦様を『大経』の仏にしたのです。救われた人が仏にするのです。そうでしょう、そうでなかったら、いくら仏だ仏だと言っても救われた人が一人もいなかったら仏でも何でもないのです。そこに親鸞聖人の、本当の仏教に遇った人の感動がこもっているわけです。分かりますかね。

前にも言ったかもしれませんが、うちの娘が三つか四つくらいの時でしたか、「お父さんとお母さんの家うちに生まれて来てよかったわ」と言ってくれた時があったのです。嬉しいじゃないですか、めちゃくちゃ嬉しくて、いまだに忘れられないのですけどね。その時に「ぼか、お前、お父さんとお母さんのうちに生まれ来たのとは違うぞ。お前が生まれて来たからお父さんとお母さんになったんやで。それまでは、お兄ちゃんとお姉ちゃんやったんやで」と言ったら「はあ」と言った(笑)。そうでしょう。子供の誕生が親にするのです。子供がなかったら親じゃない。

それと一緒に救われた人がいなかったら仏でも何でもないのです。

だから「光明無量」と言おうと「寿命無量」と言おうと、これは救われた人の感動としてあるのだということ表現するために、わざ

わが親鸞聖人はそこを続けてしまつて阿難の感動に変えているということ。ちよつとしたことですけれども、そういうところに親鸞という人の何というか、おそろしきというか、凄さというか、そういうものを感じていただくと大変ありがたいと思います。申しあげていることは分かりますね。

ですからこれからずつと学んでいく時に大事なものは、「阿難の問い」の方なのです。阿難が問うから仏陀がそれに答えている。その答えていることが「出世本懐」になつていくわけです。だから阿難の問いが出世本懐を語らせているのです。阿難の問いが「仏」にしているのです。親鸞聖人にそういう視点があるということをよく知つておいていただきたい。

だから次の『平等覚経』も阿難の問いから引用していますし、それに答えて出世本懐の文がまたあらためて引用されてきます。それは阿難の問いの方が先にあつて、その後にお釈迦様の出世本懐の文がまたあるという形になつていっているのは、今申しあげた理由によることです。分かりますかね。その辺に親鸞聖人のすばらしいところがあると思います。

教えが光となるような出会い

それで阿難は光明無量、「光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし」。つまりここも大事なのですけれど、皆さんは、仏教を一生懸命に勉強するためにここに来ているでしょう、ね。(笑)。まず最初はこうやつて来ると、理解しようと思つていないですか。そして理解できなかつたら「あの人難しい、分からん」と言つて帰るでしょう(笑)。そうだから、こつちも苦勞する。だけど、まず理解しようと思つて聞きますね。ところがそれは本当の仏

教に遇つたことにならないのです。だつて、ここ、最初から、阿難が感動した、救われたという阿難の感動を語っている。

最初から、「今日世尊、諸根悦予し姿色清淨にして、光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし」と、お釈迦様は「智慧の光」として私に今はつきりとはたらきかけてくださつていいる、こういう感動を述べているわけです。

ですから本当に救われるときには、仏教の教えが「光」になるような出遇い方をしているということ。理解じゃないの。だつて皆さん(私を含めてですが)、人間の頭なんて悪いのやから、そんな人間の頭に理解できるような仏教の覚りはありません。だから本当の覚りが、もし私たちのところにはたらきかけて来たとしたら、それは「光」として来る」と、はつきりそう言っている。僕が言っているのじゃない、阿難がそう言っている。「光として来る」というのは、ピカツとした光ではなくて、お釈迦様の教えをよく聞いていいると、今まで理解しようと思つてよく聞いていたけどよく分からなかつた。そうだけど、苦しんだり悲しんだりしている中で、なんか教えが届いた。その教えは自分が逆立ちしても分からないようなもつと深い、私たちの理解を超えているような人間の本当の姿を教えてください。さつてい

る。これは東大に行こうと京大に行こうと絶対に分からない、そんな人間の知識では分からないほど深い、本当の姿を教えてください。さつていた、といつて頭を下げる。それが「光に遇う」ということよ。そういう出遇い方をするまで勉強してください。勉強して気分がいい人もおるかもしれないけども、勉強してもなかなか分からない。それは勉強が足りないということ。本当に僕は昔よく言われた。先生によく怒られました。「勉強せい。法然上人くらい勉強しなさい」と

言われました。法然上人は頭がよかった人ですから、素晴らしい学者でしたけれども、法然上人ほど勉強をして、人間の分別では届かないような教えに触れた、それが「光」として表現されている。いいですか。

そのためには、やはり皆さんの方に問題がないといけないのです。聞きたいという問題、いろいろあるでしょう、言えないけど、それに一生懸命にこだわって「なんでやろう。どうしてやろう」と、一生懸命問うていけば必ず解ける時が来る。それが大事な。

ともかく、「光」と言うような出遇い方をしていること。そしてその「光」という言葉によって「無量寿」という、「威容顕耀にして、超絶したまえること無量なり」、この世にはない、相対分別を超えた、「永遠の真実」というものに立つことができた。「光明無量、寿命無量」、その感動がさつき言った阿難の感動として述べられていること、ここにお釈迦様と本当の出遇いの意味がある。「仏教に出遇う」ということはそういうことだということ。それをよく知っておいてください。今すぐは無理でも、その意味をよく考えていくこと。そうすると自分の学び方が間違っているのではないかということが分かってくるから。そんなふうにしてここを読んでいただければと思います。

ところで、親鸞聖人が法然上人とお遇いになった時には、皆さんよくご存知のように『歎異抄』に述べられていますね。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」。そこに最後には「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

法然上人の教えを信ずるほか何ものなし。なぜなら、法然上人にだ

まされて地獄に落ちてもいいと、私はそもそも地獄こそ自分の住み家なのだから、今更だまされても何ともないという形で述べられますね。ですから法然上人の教えを信じる理由が、「いずれの行もおよびがたき身」。これで押さえられています。これが『歎異抄』の表現です。これは「自力無効」と言うこちら側の目覚め。人間の方の目覚めですね。それを「いずれの行もおよびがたき身」、こういう言葉で表現しています。

今まで、何にでもなれるとか、頑張れば何とかなると思ってきたけども、全部人間がやることは「虚仮不実」である。だから虚仮不実ということを通して初めて真実なるものに遇っている。これは身の方から言った表現ですけれども、阿難は「五徳瑞現」で述べるでしょう。五つね。これがやっぱり凄いとこなのです。お釈迦様に遇って、遇った理由を五つ述べています。それは親鸞聖人は機の方から、『歎異抄』では「いずれの行もおよびがたき身」とこう述べている。ところが阿難尊者は、法のはたらきを五つ述べているわけです。これはやっぱり親鸞聖人が凄いというか、「阿難尊者」だと尊敬する理由だと思えます。

十二光―法のはたらき

法のはたらきと言うと、皆さんが一番分かりやすいのは「正信偈」で、『大経』に出て来るのですが、「正信偈」に「十二光」と言うのが出て来るでしょう。

「五劫、これを思惟して摂受す。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと」とあって、あまねく、「無量光・無辺光・無碍光・無対光・光炎王・清浄光・歡喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光」、

十二出てきます。これが阿弥陀如来の法のはたらき、光、智慧としてはたらいてくるはたらきを、こちらからいろんな表現で言っているわけです。例えば

「無量光」、まず無量光が出てきますね。無量光と言うのは、これは無量という意味ですから、原始時代であろうと江戸時代であろうと今の時代であろうと、どんな時代であつても必ず仏様の教えは人間にとつて智慧の光としてはたらく、無量にはたらくのだという意味ですね。それから

「無辺光」と出てきますけども、無辺光というのは、皆様方この中にも外国に行つた方がたくさんいらっしゃると思ひますけども、世界中には、まあ様々な人間がおられて、本当に価値観が違う、文化が違う、伝統が違う。こんな人と分かり合えるやろうかというくらい違うような国がいっぱいあります。けども、どんなに違つても仏様の智慧の光は必ず、どこの国でも必ず通じる、無辺に通じる。という意味で無辺光というわけです。分かりますね。ですから仏様の智慧を無量光と言つたり無辺光と言つたり、それから

「無碍光」といいますね。光と言うのは必ず遮られて影ができる。普通は。ところがどんなものも影ができないで、そして貫いていつて人間の無明の闇まで貫いてくる。だから何にも障りにならないという意味で無碍光と、こう言うわけです。それから

「無対光」と言うのは、私たちは相対的にしか物を考えられませんか。男と女、勝つか負けるか、損をするか得するか、必ず相対的にしか考えられませんが、仏様の智慧はその相対を破る。相対がないという意味で無対光という意味だと、

こういう意味が十二、『大経』には説かれているわけです。ですから、仏様の法の方のはたらきは『大経』によると十二光として説か

れている、と考えたら分かりやすいと思ひます。

仏仏相念—五つの徳—

その中で阿難尊者は五つだけ取り上げて、まず最初に

「今日、世尊、奇特の法に住したまえり」。

今日のお釈迦様は特に優れていると言つても、この娑婆で勝つか負けるか、そうじゃなくて、「法」に立つておられる。仏法と言う法に立つておられる、生きとし生けるものの真理である法というものに立つておられるのがお釈迦様ですと、こう褒めてい

るわけです。それから

「今日、世雄、仏の所住に住したまえり」。

「今日こそお釈迦様は仏であります」と。それまで阿難はひよつとしたらお釈迦様を仏と思つたことがなかったかもしれませぬ。従弟ですから。そしてずつとお釈迦様のお世話をしていた、常随じょうずい昵近じっきんのお世話係でしたからね。だからお釈迦様でも時には腹が痛いとか、今日のカレーはまずいねとか、いろんなことをおっしゃつたでしょうから、まあすぐれた人ではあつても、まさか仏とは思つていなかつたかもしれませぬ。ところがこの日に限つて「今日こそ、あなたは仏だ」と、はつきり「仏」というふうに阿難が言つたわけです。そして

「今日、世眼、導師の行に住したまえり」。

ですからあなたはこの世の中のどんな人をも導いてくださる方です。あります。

「今日、世英、最勝の道に住したまえり」。

今日こそあなたはこの世の最も優れた道に立つたお方です。

「今日、天尊、如来の徳を行じたまえり」。

今日のお釈迦様は如から来た人として、私に接して下さっている如来であります。

こういうふうにして五つの徳を褒めている。それは「十二光」をこういう形で表現したと考えていただいたいと思えます。

それと同時に、その光の教えを受けた私は、相対分別を超えて、世を超えた真実というものに立つことができました。今日のお釈迦様は、過去の仏も未来の仏も「永遠の今」として、念じておられる仏です。要するに、「お釈迦様、あなたは永遠の仏なのです」。という意味で「仏仏相念」ということを言うわけですね。ここまでがだいたい今までお話をしてきたところです。

皆さんが仏教に遇ったということ、阿難が仏教に遇ったということ、どこが違うかよく考えてみるのも面白いでしょう。

善いかな阿難

それでこれを踏まえて、今度はお釈迦様が呼びますね。

「ここに世尊、阿難に告げて曰わく、「諸天の汝を教えて来して仏に問わしむるか、自ら慧見をもって威顔を問えるか」と。」というふうにお釈迦様が阿難に問いを出します。要するに「諸天の汝を教えて」というのですから、天の神様があなたに「私が仏である」ということを教えて、今、あなたに問いを出しているのか。

「阿難、仏に白さく、「諸天の来りて我を教うる者、あることなけん。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるならくのみ」と。」

阿難が答えます。「お釈迦様に申しあげます。誰からも私は教えてもらっていません。私は自分が思ったことをそのまま問うただけであります」と。こう答えるわけです。そうすると、

「仏の言わく、善いかな阿難」、これはいいですね。お釈迦様が褒めることはめつたにありませんからね。「善いかな阿難」とお釈迦様は褒めてね、つまらんことですけど、これを漢字に直すと「善哉阿難」なのですよ。

あの食べる善哉(ぜんざい)。あれは仏教語ですよ。お釈迦様が人を褒める時に「善哉」と言つて褒めるわけです。あれが善哉という名前になったのですよ。つまらんことを言つてすみません(笑)。あれを食べて喜んだのよ、これはいいねつてお釈迦様が。だから善哉となったのですが、ええ何やつたか忘れてしまった(笑)。

阿難が仏に申しあげた。諸天が来て私に教えたではありません。私が自分で思ったことを正直に問うたまででありますと、こう言うと、お釈迦様が

「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し」。問うた問いは実に素晴らしい問いですね、とお釈迦様が褒めているわけです。そして

「深き智慧、真妙の弁才を発して、衆生を愍念せん」として、この慧義を問えり」。これはお釈迦様の言葉ですけど、「あなたは自分で分かっているかもしれないかもしれませんが、あなたの問は深い智慧に満ち溢れています。そして素晴らしい真理を讃えて、今日こそ、修行もできないし、悟りを覚えることのできない衆生、それを代表して、あなたは今問いを問うたのですよ」と。こういうふうにお釈迦様の方が答えています。

分かりますね。あなたは自分が正直に問うたと言っているけど、その通りですよ。しかしその問いは深いですよ。あなたは気が付いてないかもしれないけど、今日は、修行ができないあなたは凡夫なのだから、凡夫の阿難が「仏様だ」と叫んでいるわけですから、だから、今日は「あらゆる衆生が、如来だと分かる」、そういう教えを

説く日がやってきたと、こういう意味になります。

真実の利―出世本懐

今言った「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し」というこの問いに応えて、次にお釈迦様が出世本懐の文を述べます。

「如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に出興したまう所以は、道教を光闡し」素晴らしい言葉でしょう。如来と言うのは自分のことですから、私は如来として蓋をすることができない大いなる悲しみをもつて、この娑婆を憐れんでいるのです。この世に出てきた理由は、「道教」と言うのは仏教のことです。仏教を顕らかにして、

「群萌を拯い」、ここが大切です。「恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり」。あらゆる出来の悪い者、そういう者を救うために、「真実の利」と言うのは本願の教え、その本願の教えを説いて、群萌を救うためにこの世に出てきた。それが私の「出世本懐」です。こういうふう述べていることになりました。そして

「無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出ずるがごとし」。お釈迦様と阿難との出遇いは、何億年経つても実現することができないような出遇いである。ちょうど、浄土の靈瑞華と言う花が何億年か一遍咲くと言われている。その花が咲くように、今日は、あつてはならないというか、あつてはならないというよりも、あり得ない出遇いが起こっていると。人間の世ではあり得ない出遇いが今、起こっていると。それは浄土の靈瑞華が何億年か一遍咲くような出遇い、何でかよう分からないけれど、そういう出遇いが起こっていると。そして

「今問えるところは饒益するところ多し」。今あなたが問うた問い

は、この世間に素晴らしい利益をもたらすであろうと。

「一切の諸天・人民を開化す」。あらゆる優れた人、出来の悪い人、あらゆる人を教化することになるであろうと。

「阿難、当に知るべし」。阿難、よく知りなさいと。

「如来の正覚は、その量りがたくして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく遏絶することなし」。こういうふうにお釈迦様が最後に述べられます。

この最後に述べたのは、この『大経』の仏教と言うのは、「如来の正覚」、阿弥陀如来の覚りは、「その量りがたくして、導御したまうところ多し」、一切の導師となるであろう。「慧見無碍にして」、無碍道を一切衆生に恵んで、「よく遏絶することなし」。どんな世間の軋轢にも、どんな世間の価値観にも絶対に負けないそういう智慧を恵むであろうと。こういうふう述べています。

ですから、この最後に述べたこのお釈迦様の、

- ① 「如来の正覚は」
- ② 「その量りがたくして」
- ③ 「導御したまうところ多し」
- ④ 「慧見無碍にして」
- ⑤ 「よく遏絶することなし」

これは実は阿難が五徳瑞現を述べましたね、凡夫として救われた感動を五つ述べました。阿難が五つ述べた感動に答えてお釈迦様が『大経』の仏教はお前の言う通り五つのはたらきがあるよ」と言つて、①②③④⑤に分けて、ここでお釈迦様が述べていることになりました。

それはこの後に、憬興という朝鮮の仏教者が『述文賛』という註釈

書の中で、最後の五つの言葉は、実は、阿難の五徳瑞現の言葉を受けて、お釈迦様が『大経』の仏教はこういふはたらきがあるのだと答えているのですよと註釈しています。そこを親鸞聖人は引用していますから、それによつて、今私が申しあげたようなことが分かると思います。これはまた後で少し説明しましょう。

七地沈空―修行によつて覚りを悟る道

ところで、せっかく阿難が「五徳瑞現」と「仏仏相念」という素晴らしい世を超えた感動を述べたのに、お釈迦様は直接それを誉めればいいのに、阿難に聞き返すでしょう。「あなたは自分で問うたのか、それとも、天の神様（経典だからそう書いてますけど、まあうちよつと言うと一番出来のいい舍利弗）に聞いたのか」というようなことですね。「いやいや私はだから聞いていません」。というふうにお釈迦様の方が阿難の問いを吟味しているわけです。

なぜかということですが、当然のことですが、この『大経』が説かれるまでは浄土教はありませんね。そうすると大乘仏教の聖道門の教えしかなかったわけです。聖道門の教えで一番大切な古い経典は『般若経』です。そういう『般若経』を中心にするような自力の教えしかなかったわけですよ。自力の教えは、これまで何度かお話をしてきましたが、どの経典も「修行によつて覚りを悟る」というのが共通理解です。五十二の段階があるというふうに申しあげました。

「十信」「十往」「十行」「十回向」「十地」。十、二十、三十、四十、五十。そして「等覚」「妙覚」という、如来の覚りに到達していく。十地からが聖者・菩薩です。十回向までは凡夫です。ですから私たちは「十信」あたりにおおると思いますが、この辺にはおりません。もつ

と下の方（笑）。なぜかというとな出家してないから。出家をして戒律を守るといふことが前提です。ですから皆さんが出家をして比叡山に登ればやつと十信くらいに出来るわけです。ところが私たちは出家もしてないし、戒律もありませんから、どこか十信より下のところでごちゃごちゃしている。十地からが菩薩で、この「菩薩道」といふのが大乘仏教の仏道になります。

特に大切なのは「七地沈空」といって、十地の「初歡喜地」から七つ上がったところに「覚りを悟つてしまふ」というところがあります。ところが「空」を覚つてしまふと自分も「空」だし、周りの人もみんな「空」だし、全部「空」になつて、そこから動かなくなる。そうなるとなんか仏教が止まつてしまつて動きをなくしますから、この七地沈空の菩薩を「菩薩の死」だと言われています。この七地沈空をどんなふうを超えて行くかということが大乘仏教の一番の課題になります。それは一般的に考えると修行の激しき、修行のまじめさ、それによつて乗り越えていくということしかありません。

ところが世親の『浄土論』になりますと、この七地沈空まで来ると自力の限界だと、自力で来たところまでしかないと。ところが、ここに来た時に阿弥陀如来の本願力に遇うと、そして自力から本願力に翻つて、本願によつて等覚・妙覚という八地以上の菩薩になつていくのだというふうには、世親の『浄土論』では説かれていきます。

けれども、それを言い出すとややこしいから、七地沈空という難関を修行によつて乗り越えて行こうというのが聖道門ですよ。そしてそれを乗り越えた人だけが等覚・妙覚、「等覚」これは如来の覚りに等しい、「妙覚」といふのは如来の覚りそのものに到達するわけです。

阿難―未離欲の仏弟子

ところが阿難は、今申しあげたように、出家してからですから、この辺（十信）にはおりません。けども皆さんご存知のように阿難はお釈迦様がお亡くなりになるまでに覚りを悟れなかつたと言われています。ですから「未離欲」、欲を離れることができない仏弟子として有名な人でしたね。

私たちの所依の経典、私たちが大事に、親鸞聖人が大事にしている『大無量寿経』には、『大経』が説かれるときに相手（「対告衆」と言うのですが）がいるでしょう。その相手が大乘の菩薩を相手にしているということ、阿難のような阿羅漢を相手にしているという、この二つが『大経』の対告衆になっています。これは他の異訳の経典もそうなのです。

ところが『平等覚経』という経典は、阿難を単なる仏弟子というのではなくて、阿難のグループに私たちのような者がいっぱい入っている。優婆塞、優婆夷。優婆塞と言うのは男の信者、仏教の信者。優婆夷と言うのは女性の信者。ここです、ここです（十信より下のところ）。皆さんも一緒に阿難のグループにお入るわけです。ですから阿難という人を、仏弟子ではあつても覚りが悟れなかつた凡夫のグループ（下凡夫）に分類しているわけです。

そうすると、いいですか、今までですよ、『大経』が説かれていなかった今までの常識からして、この辺（下凡夫）にお入る者がどうして如来が分かるのか。等覚・妙覚まで来て如来が分かる。等覚の菩薩は弥勒菩薩です。ですから『大経』を読むと分かりますが、最後の方になると、お釈迦様は弥勒と阿難を一緒に呼びます。つまり阿難は凡夫であつても、本願を生きる仏弟子になった。そうすると自力で等覚の覚りを得た弥勒と一緒に阿難を一緒に

呼び出します。これは『大経』の後の方に出て来ますけどね。その先駆けがここにあるわけです。

つまり凡夫としての阿難はこの辺（十信）にお入る。だから「お釈迦様が如来だ」とか、さつき言った「五徳瑞現」とかね、こんなことが分かるわけがない。また、こんなことを言うと言われましても、この間、森喜朗さんがごちゃごちゃ言われたけど、やつぱりね、女性は女性のことしか分からないことがあるでしょう。僕は本山でそう言ったら怒られた。そんなこと言ったらあかん言うて。男は男のことしか分からんから。そういうことあるでしょう。それと同じでしょう。如来が分かるということは、当然、如来でないと分からない。だからこれまでに説いてきた仏教からすると、こんなところ（十信）にお入る阿難が「お釈迦様あなたは如来です」と叫ぶわけやから、お釈迦様は「ちよつと待て」と言つたわけです。「ちよつと待て、おい、それ本当か」と言つて。「自分で聞いているのか、それとも誰かから教えてもらったのか」というふうにお釈迦様の方が聞き返しているのは、今言つた理由によります。分かりますね。

『大経』が説かれるまでは、こういう自力の修行する仏教しかなかった。だから、その常識から考えると、阿難が八地より上の菩薩なら問うていることは分かる、ところが、とてもここまで登つてきているとは思えない阿難が、「今日はあなたは如来です」とか、それから「法に住しています」とか、それから「仏仏相念をやっています」とか、そんなこと分かるわけないやろうと言つて、お釈迦様の方が問うているわけです。これは実にまともな問いだと思いませんか。

そしてお釈迦様が問うと、阿難は「いや、そんなことはありません。私は自分で問うたのだから」と、こう言つたからお釈迦様は喜んでわけです。

「今日こそ、一切衆生が修行もしないでも、阿弥陀如来の覚りが分かるということを読説く日がやってきた」と。だから「阿難、あなたは、ただ自分の問いだと言っているかもしれないけれども、それは救われない者全部を代表して、あなたは問いを出しているのですよ」と。「よう問うてくれた」と。「今日こそあなたの問いに答える日がやってきた」、と言つて説き始められるのが『大経』です。ここに『大経』の特徴と言うか特質ということがよく分かるでしょう。修行して覚りを悟ることができない凡夫でも、教えに遇えば仏様の覚りが手に入るような教え、それが「本願の教え」として説くことになってきます。いいですかね、ちよつとそれでは休憩しましょう。

《講義 一》

『法華経』のテーマ―乗と三乗

それではもうしばらくお話をさせてもらいます。調子が出ないものですから、少し解説じみて申し訳ありませんが、それでもお分かりいただけるようにと思つて一生懸命お話をしているのですけれども、解説だけだと眠たくなってくるから、まことに申し訳ないと思つております。ちよつと雑談じみてお話を申しあげますと、この『大経』という浄土教の経典が説かれるまでは、先ほど申しあげましたように、聖道門・自力の仏教しかないわけです。そして、その聖道門・自力の仏教の一番頂点にあつた経典が『法華経』です。ですから日本でも天台宗はちよつと威張つているでしょう。ずつと天台宗は力を持つてきました。それは『法華経』が出世本懐経だからです。

ところが『法華経』が説かれたのは、ある日突然お釈迦様が教えを

聞いている弟子たちに向かつて、「私は今まで三乗の教えを説いてきた」と。「三乗」と言うのは分かりますかね。「一乗」と「三乗」の三乗です。三乗と言うのは「声聞・独覺・菩薩」と、声聞と獨覺というのは、これはお釈迦様の直接の直弟子達ですから、小乗仏教の仏弟子達です。それに対して大乘仏教は菩薩を説きますから、声聞と獨覺というお釈迦様の直弟子・小乗仏教の阿羅漢たちは自分のためだけに仏教を聞いて、お釈迦様のように自分が悟つた覚りを人に伝えない。だからこれは自利だけあつて利他がないと。だから自利利他を実現する大乘の菩薩になりなさいと。これが三乗の教えです。分かりやすいでしょう。具体的に小乗の仏教ではなくて大乘の仏教に生きる者になりなさいよと。大乘の仏教に生きる者になる時には菩薩になりなさいと言つて教える。それが三乗の教えです。

ところがある時、お釈迦様が「今まで、実は、三乗の教えを説いて来たけど、本当は三乗を説くのではなくて一乗の真実が説きたかつたのです」と。「一乗の真実が説きたかつた。それが私の出世の大事である」と。さつき「出世の大事」という言葉が出てきましたね。こういうふうにお釈迦様が言うわけです。そうしたら、聞いていた仏弟子たちがちよつと怒つてしまつたのです。今まで三乗の教えを聞いてきて自分は覚りを悟つたのだと、それが今更三乗の教えを説くのではなくて、本当は一乗真実が説きたいなんて、そんな馬鹿なことがあるかと言つて怒つてしまつたのです。

それもまあそうですね。まあこの会は田畑先生と五年間の約束ですから、五年経つて最後の授業で「本当は、私はこれまで言つたことの中で本当のことを言つたことはありません」と（笑）。「実は、本当はこういうことが言いたかつただけども、まあ説いても分からんから言わなかつたのだ」というようなことを言つたら怒るでしょ

う、皆さん。それはそうですよ。「馬鹿なことを言うな」と、「今まで聞いてきたのはどないなるのや」と。それと同じことが起こったのです。そして仏弟子たちが怒って退出していきまます。ザーっと、ほとんどの仏弟子たちがね。それを「増上慢」と言います。ほとんどの菩薩たちが怒って退出してしまうのですよ。

ところが、そこに退出しなかった仏弟子たちが残りました。舍利弗を中心にしてね。舍利弗という仏弟子が一番よくできる仏弟子ですが、その舍利弗が「お釈迦様、三乗の声聞・独覺・菩薩と言うのではなくて、一乗の真実が説きたかったというのなら、その一乗の真実を説いて下さい」と頼むのです。そうしたらお釈迦様は「いや、一乗の真実はいくら説いても言葉を超えているから分からない。だからお断りする」と言って断ります。ところが舍利弗は、やつぱり立派な仏弟子ですから、「そんなことを言わないでお釈迦様説いてください」と食い下がって、三回お願いします。「仏の顔も三度」と言いますから、經典を読むと全部三回です。不思議です、經典を読むと本当に三回ですね。

お釈迦様がお亡くなりになる時に、「阿難、水をくれ」と言うわけですよ。そしたら「いやお釈迦様、今、お水を飲んだら命が終わりますから、お願いだから飲まないでください」と言いますが、「水をくれ」と。三回目にもちよつと大きい声で怒って「水をくれ！」と言うのです。それで水をお飲みになって亡くなったと言われてますけどね。三度。ですから舍利弗が三度要請して、そして三度お釈迦様は断る。それを「三止三請」と言います。三回要請して四回目にやつと、「それじゃあ今から、一乗の真実を説く」と言って説かれたのが『法華經』なのです。

ですから、『法華經』のテーマは「一乗と三乗」。一乗と三乗という

関係がどうなっているか。それから「真実と方便」。こういうのがテーマになっている經典です。

超エリートが聞いた經典

しかし、今、私が申しあげたように、經典の性格がよく分かるでしょう。『大經』の方は、覺りを悟れない阿難が、ある日お釈迦様の教えに遇って感動して、そしてこの世を超えたという感動を述べられた經典ですね。ですから、お釈迦様が「修行もできない出家もできない凡夫でも、必ず仏の覺りが分かる」という教えを説く日が今日やってきた」と言って説きはじめてのが『大經』です。それに対して『法華經』の方は、沢山の菩薩が退出していく中に、最後に残ったほんの数名だけが聞いた。つまり超エリートたちが聞いた經典になります。まず、ここが違うところです。

皆さんはどちらをとりますか、超エリートの方を勉強しますか。実は浄土教の七祖の方々は全員最初は聖道門で勉強した人達ばかりです。自力の仏教を勉強した人達ばかりなのです。親鸞聖人も法然上人もそうです。比叡山で勉強しました。道綽禪師も善導大師もそうですよ。道綽禪師は『涅槃經』の仏教者です。そんなふうには世親も小乗仏教の論師だったので、龍樹は、初めは小乗仏教の自力の仏教者でした。この人はちよつと悪いことをしたらしくて、身を隠す術を習って王宮に忍び込んでたくさんの方が妊娠したらしい(笑)。そんなことをしたのかと思いますけれども、若い頃にそんなことをしているから仏教に心を開いたのでしょうね。そんなふうには七祖の方々全員、初めはこの『法華經』で苦勞して修行した人たちばかりが本願の教えに目を開いていくということになっていきます。

阿弥陀経―舍利弗が抱える課題

こんなふうに経典を見てもよく分かるでしょう。その経典の特徴と云うのが。ただね、浄土教は実は一番出来の悪い阿難に『大経』を説くでしょう。ところが一番出来のいい舍利弗に『阿弥陀経』を説くじゃないですか。ご法事の際に『阿弥陀経』をあげるでしょう。「舍利弗、舍利弗」とうるさいほど言うでしょう。あれは舍利弗を呼び出しているのですよ。あれはやっぱり凄いものですよ。まあ『阿弥陀経』のことはね、簡単に言いますとね、「舍利弗のような優れた仏弟子でも、自分で分からない自力があるのよ」と教えているのが『阿弥陀経』だと考えてください。第二十願の問題です。

皆さん、最近、あんまりいなくなりましたかね、私たちが若い頃には、こういう会座に来るとたくさんおりましたよ、じいちゃんやばあちゃんたちが。「信心を持つ」という人達が。じいちゃんやばあちゃんたちがね、僕らの若いような者の話をこう聞いてとって、「ううん？ 違う！」ちゆなこと言うて（笑）。ほんとはんと、おった。うん北陸なんかに行くといっぱいおりましたし、そういうばあちゃんたちが「心の時代」(ZEN・コレ)とかに出とったわね。そういうばあちゃんたちの前で僕はよう話をしたことがあるよ。そうしたら、やっぱりね、さすがにばあちゃんたち立派でした。やっぱり若い頃は一生懸命こつちは話しとるけど、「ばあちゃんたち、ああいうことを言うとなつたんやな」ということが最近よく分かる。そういうじいちゃんやばあちゃんたちがよくおりましたでしょう。

そしてそういう人たちが、こういう法座を仕切つるといふか、そして若い奴が来ると、「もうちよつとしつかり勉強しなさい」といふようなことを言つて、「うちの嫁はちつとも仏法を聞かん」、「あれが玉に傷や」といふようなことを言つて、そういう人たちは、ちよつ

とこう威張つとるわ。あれがあかんちゆうねん。自分が聞いた仏教をいつの間にか自分の手柄にしちゃうから。人間として当たり前のことよ。誰でもそうよね。ちよつと自慢したいことがあつたら自慢するやん。何でもかんでも自慢するで、じいちゃんでもばあちゃんでも。もうよぼよぼになつて、何も自慢する事がなくなつてくると歳を自慢しようが、歳（笑）。「もう私は九十歳もなつて先生：」（笑）。知らん顔しとつたら怒るよ。「ばあちゃん九十歳といつたら若う見えるで」「またそんなこと言うて：」（笑）。歳を自慢しよるやろう、しまいに。あれが人間の本性や。

だから、せつかく仏法聞いて「自力無効」だということが分かつているにもかかわらず、それがいつの間にか自分の手柄に変わつてしまふ。それは人間として当たり前のこと。だから舍利弗のようによくできる菩薩でも、仏から見たら、仏の智慧は「深広無涯底」よ。これは菩薩が逆立ちしても届かないと言われている。その阿弥陀如来の智慧から見ると、どんなに優れた仏弟子であっても、あなたに分らない煩惱があるということを知りなさいと説いているのが『阿弥陀経』です。それが第二十願の問題になります。ですから浄土教というのは、やっぱり凄い教で、どうにもならない凡夫をすべて救うと。けれどもエリートの菩薩たちには「あなた達が分からない、仏しか分からない煩惱があるのだ」ということを知らせて、阿弥陀如来の智慧が最も優れているということをお教えるのが浄土教なのです。

大経―凡夫の救いが説かれた経典

そういう意味で『法華経』は超エリートたちに説かれていく経典、その頂点にいるのが舍利弗です。それに対して『大経』は、修行もで

きないし出家もできない、生活するのが精一杯の私たち凡夫の救いが説かれている経典です。コロナ騒動になって、まあ本当に大変ですけれども、思想的なことに悩むというよりも、まあはつきり言う生活苦に悩んでいく、そういう人でも、これまで出遇ってきた教えによつて自分になつていきます。これまで出遇ってきた人たちの影響によつてね、親、子供、それから学校の先生、幼稚園の先生、たくさんの人に出遇つて人間はできてきている。自分ができてきている。

だから出遇つただけで分かる教え、それが「本願の教え」です。出遇つただけで分かる教えにしたのが本願の教えですから、その「出遇い」がどうして起こるかと言うことは難しいけれども、「阿難のように光と、相対を越えた真実に立つ、そういう南無阿弥陀仏の教えを今日やっと説く日が来た」と、こう言つてお釈迦様が『大経』を説き出されるのです。

実は、出世本懐の文がこんなに明確に書かれている経典は、親鸞聖人が選んだこの所依の経典（『大無量寿経』Ⅱ『大経』・康僧鎧訳）しかありません。ここに、「如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう」と。「私は如から来たものとして、欲界・色界・無色界の人間の世界を見ていると悲しくてしようがない。それを憐れんでこの世に釈迦として出てきた。その理由は仏道を顕らかにして群萌を救うためだ」と。これが大事です。これが『大経』の眼目です。

「群萌」と言うのは分かりますか。インドに行つたことある？

田畑先生不是吗。（ないです。）そうですね、それはインドに行かないといけませんね（笑）。インドに行つたことないですか。ああ、あります。よかったです。全く日本と違つた大地で、そして近代国家ではないですから、何と言うか大地の中でべたつとへたり

込んで生きているような人たちがばかりでね、なんか金儲けせんならんという気もあまりないし、何と言うか、まあ日本と全然違ひますよ。

インドに行つたのは乾期に行つたでしょう。冬でしょう。二月は乾期の終わりです。その頃だいたい日本から行く時には、一月か二月かね、その頃に行く。なぜかという、向こうが乾期だからです。雨が降らないから、三月から四月くらいになると今度は雨期になります。乾期に行くと分かるでしょう、インドの大地は真つ赤つかです。赤茶けた赤土が広がっていて、まったく草なんか見えないようなところがたくさんあります。ところが雨期になるとね、その真つ赤な大地が緑に変わるので。死んでるといふか、人から踏みつけにされて、そして芽があるとも分らない、草が生えているとも分らないのだけれども、雨期になるとそこから、ぶわあつと芽が出てきて緑の絨毯になります。それを「群萌」といいます。分かりますね。踏みつけにされて、生きていかどうか分からない、ただ黙々と大地の中で縁を待つてね、雨が降つてくると一斉に芽を吹いて生きて来る。それを群萌と言うのです。

それを救う経典。分かるでしょう。

「如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり」。

「この世に私が釈迦として出てきたのは、仏道を起こして、人に踏みつけにされて、生きていかどうか分からないけれども、雨の縁を得て芽を出すような、そういう群萌たちこそ救うために、私は本願の教えを説くために、この世に出てきたのである」。こんなふうにお釈迦様がここに出世本懐の文章を宣言しています。見事な文章で

すね。こういう文章は、私たちが所依の経典としている『大経』（康僧鎧訳）しかありません。その後、これは大切なのですが、この後のことは懐興師の『述文賛』が、そこを指摘していますから、そこまで急いで見ていきましよう。

『無量寿如来会』からの引用

その次、今、『大経』の出世本懐の文を引用した親鸞聖人は、もう一度異訳の経典で同じところを引用します。まず、『無量寿如来会』の方ですね。新訳の「無量寿如来会に言たまわく」とあって、

「阿難、仏に白して言さく、「世尊、我如来の光瑞希有なるを見たまつるがゆえに、この念を発せり。天等に因るにあらず」と。」

これ分かりますね。先程申しましたように、お釈迦様が阿難にもう一度聞き返す、「だれかから教えてもらったのか」と聞き返すわけです。そして、それに対して阿難が「世尊、我如来の光瑞希有なるを見たまつるがゆえに、この念を発せり。天等に因るにあらず」と。天等に教えてもらったわけではありません。自分で問うたのです」という、同じところが引用されているわけです。そして

「仏、阿難に告げたまわく」。お釈迦様は阿難に告げられた。

「善いかな、善いかな」。ここは「善哉」が二杯になつてますね（笑）。

「善いかな、善いかな。汝、今快（よ）く問えり。よく微妙の弁才を観察して、よく如来に如是の義を問いたてまつれり。汝、一切如来・応・正等覚および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして、大士世間に出現したまえり。かるがゆえにこの義を問いたてまつる。また、もろもろの衆生を哀愍し利樂せんがためのゆえに、よく如来に如是の義を問いたてまつれり」

と。」

ここまでが阿難がお釈迦様に問われて、そして阿難が「私が問うたのです」と答えた。それに対してお釈迦様が出世本懐の文を述べた。所依の経典（『大経』・康僧鎧訳）では出世本懐の文でした。ところがここでは出世本懐の文はほとんどないでしょう。これがしかし、『如来会』の方の出世本懐の文章になつていのです。ですから私たちの所依の経典がいかに正しくというか、正確に出世本懐の言葉を告げているかということがよく分かります。ここではお釈迦様が「よく聞いた、よく聞いた」と、「あなたが、今、よくその問いを問うてくれた」と。「仏の微妙の法をよく観察して、そして如来に、その法の本當の意義を問おうとして、あなたは問うてくれた」と。

「汝、一切如来・応・正等覚および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして、大士世間に出現したまえり」。ここはなかなか難しい文章でね、まあ解釈がいろいろあるということを知り承知しておりますが、ここでは、「汝」というのですから阿難ですね。「阿難、あなたの問いは自分で分からないほど深い意味を持っています。あなたは修行もできないし凡夫のまままで覚りを悟る、そういう仏教があると今問うてくれた。だからあなたは（汝）、一切如来・応・正等覚および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして、大士世間に出現したまえり」と、こうあります。だからここはまあ、お釈迦様が「汝」と呼んでいいますから阿難のことだと思ふのですが、ここはお釈迦様のことだと解釈している方もおります。「大士世間に出現したまえり」というのは、「私がこの世に出てきたのだ」と、こう読んで出世本懐の文章だと、こういうふう読んで参考書もあります。いずれにしても「阿難、あなたは、一切如来・応・正等覚および大悲に安住し

て、一切の衆生を救おうとして、優曇華の希有なるがごとくなる出遇いを私と果たしてくださいました。阿難、あなたは世に出現してくださった」と。こういうふうにお釈迦様が言っているのであろうかと思いますが、

「かるがゆえにこの義を問いたてまつる」と。「だからあなたは問いを問うてくださいました」。

「また、もろもろの衆生を哀愍し利樂せんがためのゆえに、よく如来に如是の義を問いたてまつれり」と。

ここまでは『無量寿如来会』からの引文です。

これはよく見ると、阿難の問いをまとめていることになります。そういうことですね。

『平等覚経』からの引用

その阿難の問いを受けて、今度は『平等覚経』の方。

『平等覚経』に言わく、仏、阿難に告げたまわく、

「お釈迦様が阿難に述べられた」。

「世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし、天下に仏まします、いまし華の出ずるがごとしならくのみ」。

「浄土の何億年かに一遍咲く優曇鉢樹という樹がある。それは実があるけれども花が咲かないと。ところが、今、この世に仏がいらっしゃる。それは実はあるけど花が咲かない優曇華がまるで花を付けたようなものである」。

「世間に仏ましますけども、はなはだ値うことを得ること難し。今、我仏に作りて天下に出でたり。もし大徳ありて、聡明善心にして仏意を知るによつて、もしわすれずは、仏辺にありて仏に侍えたまふるなり。もし今問えるところ、普く聴き、諦らかに聴け」と。已

上」とあります。

ここは先ほど申しました『無量寿如来会』の阿難の問いを受けて、お釈迦様が「自分は優曇鉢樹のようにこの世に出てきた。けれども私と遇うことは実に難しいのだ。ところが、今、阿難は、私と出遇うということが起こっている。その出遇いを受けて、その意味をよく問うならば、『大経』の本願の教えをよく問うならば、それはこの上ない喜びである。だからよく聴け、諦らかに聴け」と、こう言つて「本願の教え」が説き出されるわけです。ここは『大経』で言う「出世本懐」、お釈迦様の出世本懐に当たるところなのです。今言つたように出世本懐の文と見えないでしょう。だけど出世本懐に当たるところですから、あんなきれいに出世本懐の文が出ているのは、私たちの所依の經典であるということがよく分かります。

というように出世本懐は、先程、最初に申しあげましたように、お釈迦様が勝手に述べたのではないのです。凡夫として救われた阿難がお釈迦様を仏にした。凡夫として救われた阿難の問いがお釈迦様に出世本懐を述べさせた。それは本願でしか救われないのだと。

「あなたが光とか光明無量・寿命無量と感動したのは、あれは本願の教えを聞いたからですよ」と言つて、もう一度本願の教えを最初から説き始めるのが『大経』の教えになります。いいですかね。

それで親鸞聖人が、僕が今日最初に申し上げましたように、少しの読み替えによつて、阿難の問いによつて出世本懐を述べたのですよ、ということを証明するために、あえてもう一度ここで『如来会』の阿難の問いを出して、この阿難の問いに答えたのが『平等覚経』のこの仏の答えですと。ちゃんとした出世本懐の文章に見えませんけれども、これが出世本懐の文章になります。これによつて、一応、『大経』の本願の教えが「群萌を救う經典」なのだということが

よく分かったと思います。

『述文贊』からの引用

その後に憬興(憬興と言う人は朝鮮の学者です)の『述文贊』という『大経』の註釈書があります。その註釈書を親鸞聖人はここで引用します。どういう意味かと言うと、先ほど私が申しあげましたように、「修行もしないで凡夫のまままで救われた」という阿難の感動が「五徳瑞現」として説かれていましたね。それがここに出ています。

まず一番、「今日世尊住奇特法」、これが①です。「今日世尊住奇特法」というのは、神通輪に依つて現じたまうところの相なり、ただ常に異なるのみにあらず、また等しき者なきがゆえに」。こういうふうな註釈を『述文贊』で憬興師は付けていきます。この註釈をいちいち解説していると面倒くさいから、とりあえず大切なところだけ、まず一番目に「今日世尊住奇特法」をあげる。当然ですね。そして解説をしている。

二番目に「今日世雄住仏所住」という言葉をあげている。そして、それについて「普等三昧に住して、よく衆魔・雄健天を制するがゆえに」と言う註釈を付けています。

三番目に「今日世眼住導師行」というのは、「五眼を導師の行と名づく、衆生を引導するに過上なきがゆえに」。これが三番目の註釈です。

四番目に「今日世英住最勝道」というのは、「とあつて、「仏、四智に住したまう、独り秀でたまえること、匹しきことなきがゆえに」。こういう註釈を付けています。

そして五番目に「今日天尊行如来徳」というのは、「すなわち第一義天なり、仏性不空の義をもつてのゆえに」。

ここまでが①②③④⑤という阿難の「五徳瑞現」の註釈の解説です。分かりますね。

そしてその後に、ここはちよつとややこしいのですが、どうしても眠たい人はどうぞ(笑)。ややこしいのですが、大事なところですので申しあげておきます。

先ほど申しましたように、

阿難が「五徳瑞現」を言った、それは凡夫として救われた感動でしたね。ですからそれを受けてお釈迦様は『大経』の仏教はあなたが言うように救われるのですよ」と言つて、一番最後に、

「如来の正覚は、その知量りがたくして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく過絶することなし」と答えたのです。

この「如来の正覚は」が一番の「住奇特法」に相当する。

二番目の「住仏所住」、仏の所住に住したまえり、というのが「その知量りがたくして」に相当する。

三番目の五徳瑞現という「住導師行」、導師の行に住する、というのが「導御したまう」に相当すると。

四番目の「住最勝道」、最勝の道に住する、というのが「慧見無碍にして」に相当すると。

五番目の最後の、如来の徳を行じる、「行如来徳」、これがお釈迦様の言葉で言うと「よく過絶することなし」、これに相当すると。

こちら側(今日)の表現は、前の方は、全部阿難の「五徳瑞現」の言葉。後の方はすべてお釈迦様の言葉、お釈迦様の『大経』の仏道の表明。これが二つ対応している。

そうですね、凡夫が救われたという感動が述べられているから、救われたという感動が、その通りですよと。

『大経』の仏教は、「如来の正覚はその知量りがたくして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく過絶することなし」。こういう仏道なのだから、阿難が言った通りですよと、お釈迦様が答えた。だから、「お釈迦様の答え」と「五徳瑞現の阿難の問い」とが一つになつているのだ、というのを述べているのが、この憬興師の『述文贊』というものなのです。これは実によく分かる。当たり前といえども当たり前なのですが、よく分かるところですから、その通り親鸞聖人が引用しているわけです。

ところが、その次に「**匹しき事なきがゆえに**」。「今日天尊行如来徳」というのは、すなわち第一義天なり、仏性不空の義をもつてのゆえに」。ここまでが「五徳瑞現」なのです。

そしてそのあとに、「**阿難当知如来正覚**」というは、すなわち奇特の法なり」。これです。お釈迦様が「如来の正覚」と言ったのは阿難が「奇特の法」と言ったことですよと一つにしている。これは分かれますね。

ところがその次にね、本当は「阿難が**「住仏所住」と言ったのは「その知量りがたし」とお釈迦様が言ったことですよ**」、というふうに来ないといけないわけです。ところが親鸞聖人は、なぜかそれを飛び抜かしているのです。二番目の「住仏所住」（「其智難量」と三番目の「住導師行」（「多所導御」）の二つを飛び抜かして、「乃至」も何も付けないでいきなり四番目の「**慧見無碍**」というは、**最勝の道を述するなり**」。とこう来ている。そうすると、この二つを飛び抜かしてしまつて、一番目からいきなり四番目に来てしまつています。要するに五つあるはずのものを、この三つだけの引用にしてしまつてあるわけです。

言っていること分かりますかね。要するに二つ省略している。ところが普通、省略する場合は「乃至」を付けるのですが、ここは「乃至」も付けずに省略している。

参考書を見ると、何で省略したかという理由は、五つ書くのが面倒くさかつたからと（笑）。要するにもう言わなくても分かっているから、この三つ（「如来正覚」、「慧見無碍」、「無能過絶」）だけ引用したのだと参考書は書いています。そんな馬鹿なことはありません。面倒くさかつたからとかね、いらなかつたとか、そんなことはありません。

慧見無碍 無能過絶

もうあまり時間がないのでつきり申します。これはね、

まず最初、「**如来の正覚**」、これは絶対いりますよね。阿弥陀如来の正覚、そこから始まる。それはそうです。阿弥陀如来の正覚によつて「光明無量・寿命無量」が始まったのですからね。だからこれは絶対いる。これはね、はつきり言いましょうね。

「**慧見無碍（慧見無碍なり）**」、「無碍道に立つ」、この「無碍道に立つ」というのは「**必可超証大涅槃**」というのですが、「**信の巻**」ではこの「**必可超証大涅槃**」と「**金剛心の行人**」の二つが、真の仏弟子の定義として挙げられています。そして、

「**無能過絶（よく過絶することなし）**」というのは「如来の徳」、最初に申しましたように、皆さんテレビとかインターネットとか毎日いっぱい見ているでしょう。情報が山ほどあるね、今。何を信じていいか、よく分からんようになる。誰が本当のことを言っているのか、何が本当なのか分からないようになります。そしていろいろ迷っていく。そしてそういう世間の価値観に迷わされて、結局、

自分は何なのやろうと思つて、何にも無いんじゃないかなと思つて悩むでしょう。そうじゃなくて「金剛心の行人」。

世間の法にも、それから世間の価値観にも、それから他宗の価値観にも、何物にも負けないダイヤモンドのような強い心を持つ、そういう者に生まれ変わる。

この「無碍道に立つ」ということと、「金剛心の行人」ということ、これがこれから皆さんと一緒にずつと『教行信証』を勉強していきまされども、『大経』の仏教が生み出す人間像なのです。つまり「真の仏弟子」です。阿弥陀如来の覚り、涅槃の覚りを知ることが出来た者は「念仏者は無碍の一道なり」『歎異抄』はそうですね。ですから「念仏者は無碍の一道なり」。あれが『歎異抄』の中心になります。無碍道を生きる者になる。

それから、これは法然上人のところで問題になったことなのですが、「二河白道」で、「前に行つても死ぬ、後ろを振り返ると、後ろから群賊悪獣が押し寄せて来る、横に逃げようとしても逃げる事が出来ない、もう自力では救われない、お手上げだ」という「三定死」を通してはじめて如来の本願の教えが聞こえる、と出てきますね。あの「群族悪獣というのが聖道門なのだ」と法然が『選択集』で書いたために、明恵がカンカンに怒つて『摧邪輪』を書くわけです。つまりこの「無能遏絶（よく遏絶することなし）」という価値観は、仏教の伝統で言えば、自力の聖道門の教えに負けてしまう凡夫であつても、阿弥陀如来の本願の教えにあつた者は、大乘の仏教のどんな仏教の価値観にも負けない、凡夫として正直に生ききつて、そして命が向かう涅槃に帰つて行く、それで十分なのだ。だからどんな価値観にも負けない、というのが「金剛心の行人」ということです。

真の仏弟子―無碍道に立つ、金剛心の行人

言い方を変えましょうか。言い方を変えようと、聖道門の人たちは「浄土門の教えは凡夫の教えだから方便だ」と言うわけです。本当は「覚りを悟る」ということが目標なのに、それが出来ないから、「念仏称えて浄土に生まれよ」なんていう方便の教えを教えているのだと。だから、「凡夫は覚りを悟れない」、これが聖道門の通説です。凡夫は覚りを悟れない。

それに対して、「生死即涅槃を証知して無碍道に立つのだ」というのが親鸞聖人の主張でしょう。「生死即涅槃」、これは仏教の覚りですからね。それを信心としていただいて「無碍道に立つ」のだと。だから凡夫であつても、凡夫は覚りを悟れないけれども、本願の教えによつて覚りをいただくことが出来る。それによつて無碍道に立つのだ、と言うのが浄土門の教えです。

もう一つは、「凡夫は仏道を歩けない、覚りを悟れないし、仏道を歩くこともできない」というのが聖道門の主張です。それに対して、そんなことはない、凡夫であつても本願の信心によつてダイヤモンドのような智慧に立つて、そして、どんな価値観にも負けないで、最後まで浄土に向かつて歩んでいくことが出来る。それが「金剛心の行人」です。

ですから親鸞聖人はこの「教の巻」で出世本懐の文を出しましたね。その「出世本懐の文によつて実現する仏道は、無碍道と金剛心の行人という、真の仏弟子」を生むのだ」というふうに「教の巻」できちつと言うために、この「無碍道」と「金剛心の行人」の二つだけを残して、あとは省略しました。よく分かるから。単純な話です。

「本願の仏教に遇つたらどうなるの？」それは、この障り多き世

の中をどんな価値観にも負けず、信心に生きて、最後には必ず仏様の世界に帰っていく。そういう信念を生き通していくことが出来る。そういうものになるのですよ。それが真の仏弟子です」。

ですから、この真の仏弟子というのは、今度は「信の巻」に説かれていますから、その「信の巻」のところでもう一回出てきます。その時によく見ると、ここと同じことが言われます。ですから、ここは「教の巻」ですから、『大経』の経典について出世本懐の文章を出していますけれども、最終的な、『教行信証』の結論までここにちゃんと述べて、『大経』の仏道はこうなるんですということを親鸞聖人は言っているということになります。この辺が、やっぱり親鸞という人の凄いところです。

ちよつとこれ抜かしているから、普通の目から見ると五つ言うのが面倒くさかったのかなとか、五つ言わなくても、当たり前のことだから抜かしたんやなとか、ふつと通るところですけれども、よく考えると、残しているところが大事なのです。なぜこれを残しているのか。それは「真の仏弟子」と言うところだけを残している。だから『大経』の本願の教えに触れたら、阿難でも真の仏弟子になるということをも、もう「教の巻」のところから宣言しているということになります。ですから「信の巻」に行くと、今度は真の仏弟子とは何かということが詳しく述べられていきます。『歎異抄』では「無碍の一道」と、これが中心になるわけです。こんなふうになっているのです。

親鸞聖人の五徳瑞現

そして、時間がありませんが、最後に皆さん聖典を見てください。「しかればすなわち、これ顕真実教の明証なり」。

「これまで述べてきて分かるでしょう」という意味です。これま

で述べてきたことでよく分かるでしょうと、真実の教えを顕らかにする。それがこの「教の巻」の記述です、真実の教えの顕らかな証拠です、と。そして

「誠にこれ」と言つて、

「如来興世の正説、奇特最勝の妙典、一乗究竟の極説、速疾円融の金言、十方称讃の誠言、時機純熟の真教なり。知るべし」とあります。全体をまとめて

「如来興世の正説」、お釈迦様がこの世にお出ましになった正しい『大経』の教えは、まず

「奇特最勝の妙典」であること。「奇特最勝の妙典」というのが一です。「奇特の法に住したまえり」です。二番目に

「一乗究竟の極説」であること。「一乗」というのは分かりますね。どんな人も平等に救われる教えであること。

「速疾円融の金言」であること。凡夫のまままで修行することなく、今、仏様の覚りが名号によつて実現される教えであるということ。

「十方称讃の誠言」、その教えは、どんな仏様も必ず褒める。阿弥陀の覚りこそ根源仏の覚りであるということ。そして

「時機純熟の真教」、これは、末法の私のような者まで救われるという教えであること。

というふうには、

「如来興世の正説」は、お釈迦様の『大経』は、「奇特最勝の妙典」、「一乗究竟の極説」、「速疾円融の金言」、「十方称讃の誠言」、「時機純熟の真教」。五つありますね。これが実は「親鸞聖人の五徳瑞現」です。親鸞聖人が『大経』の教えによつて救われた。それを「阿難の五徳瑞現」に合わせて、自分の言葉で表現し直しているところ。それが、今言つたところですよ。

時間ちようどになりましたが、今申しあげたところは実に大事なところなのです。よく人の教えを「ああでもない、こうでもない」と非難する人がおりますけど、非難するときには「自分は、これはこう思う」というふうに先に言っておください。自分の意見を言わずに人のことばかり非難して、「お前はなんや」と聞いたたら、「いや俺はまあともかくとして」みたいな非難が多い。

親鸞はそれをしていない。「私は『大経』の教えによって、時機純熟の教えとして救われたのです。一乗究竟の教えとして救われたのです」と、ちゃんと阿難の五徳瑞現に合わせてご自身の五徳瑞現を最後に述べておられるのです。ここに親鸞聖人のやつぱり凄いところがありますね。分かりますかね。

皆さんもそういうふうには仏教を勉強していただくと、恐らく死ぬ前には「正信偈」を書くと思います（笑）。ご自分の「正信偈」をね。「私はこんふうに教えをいただいて、人生に恵まれたとは言えないけれども、こんなふうに助かっていったのです。だから、ありがたかった、うれしかった。」と、お一人おひとり書けるはずですよ。

それを親鸞聖人はご自分の立場で、最後に自分の五徳瑞現を述べて、「私は阿難と同じように救われていったのです。だからここに凡夫が救われる、平等に救われるという顕らかなる証拠があるでしょう。」と、こう言つて「教の巻」が終わっていくわけです。

どうですかね、ちよつとむずかしかったかな。ちよつと調子悪いから僕はまじめにしゃべったんや、今日は（笑）。まじめにしゃべると眠たくなるからね。だけど大事なことを言っていますよ。これ多分、文章にすると分かりやすいかもしれない。何遍も読むと分かり

やすいかもしれません。一応お話はこれで。

《質疑応答》

（質問者一）

「・・・どうもありがとうございました。先生、「教の巻」のところは皆さんもそうでしょうが、質問しにくいと思うのですが、私を含めてですが、今日の先生の話がまったく分からんとは言いませんが、整理がつかない人が半分くらいいらっしゃると思うので、それをちよつと解きほぐす意味で、僕の幼稚な質問に対して別な角度から答えていただけますでしょうか。

先生、この「光顔魏魏」のところは、先生の読まれました七ページの『大経』の「発起序」のところの「五徳瑞現」というのは阿難の言葉ですよ、今日世尊奇特の法に住したまえり」とか言つてね。言つてみたら、いくら如来と如来と言つても、凡夫の阿難が言っている五つのことですよ。それを聞いてみた結論的には、親鸞聖人も五徳瑞現のことに揃えて、今日講義いただいたとは、いろんな経典を引用されているわけです。親鸞聖人は最後にまた、それに対応する親鸞聖人の五徳瑞現を述べられている。そのへんがよく分からないですけど、凡夫の阿難が言つた五徳瑞現というのは、お釈迦様が阿難に言わしているという『大経』の話の中で、ここがちよつと幼稚なんですけど、「お釈迦様が言いたいことを、ただ阿難の口から、お釈迦様を讃えるという形で五徳瑞現が出てきているのでしょうか」。僕の言っていること分かります」

（先生）分かる分かる。要するに単純な話ですよ。阿難がね、ある

日突然、「お釈迦様、今まで一緒にいたお釈迦様が、今日は光顔魏魏と輝いて見えます。」という感動を述べたわけよ。その感動の内容が、実は、如来そのものを褒めている言葉が五つ述べられているわけよ。如来の内容が。「あなたは、今日は、今までは釈迦族の王子であつた人が出家して修行者だと思つていただけ、今日のお釈迦様はそうではない、如来です」と言つて、阿難が感動を述べたわけよ。だから五徳瑞現というのは、救われた方の阿難の感動を正直に阿難が述べたわけ。そんだけのことです。

(質問者一)「ただそんだけのことだけど、『大経』でも親鸞聖人の読み方でも、それは真実の言葉の五つだというふうにとらえているわけですよ」

(先生) もちろん。救われた方は、例えばあなたが、もし本当の意味で救われたというときには、この五つの言葉と同じ内容を、違つた表現で述べるかもしれません。

(質問者一)「いや僕が言つたら先生、五つの真実のことを言うかどうか分からんじゃないですか。」

(先生) 分からんよ。だけど、

(質問者一)「訳の分からんことを五つ言っているかもしれないじゃないですか。僕が言っているのはそのへんですよ。」

(先生) だから言つてるでしょう。真実の教えに本當に遇つた時には、遇つた時にはというのは、「光明無量」と「寿命無量」、「自分の分別が破られるような、相対分別が破られるような教えに遇つて、分別を越えた一如の真実に立つたんや」と、それが世を超えた感動やね。その世を超えた感動に立つた阿難が、「私をこんなふうにしたせたあなたは如来です」と。「私を如来の覺りに立たせたのだから、あなたは如来です」と言つて、如来の徳を五つ褒めたわけや。それ

が「五徳瑞現」や。

だから、君は別に、訳の分からんことを言うかしらんけど、それは、訳の分からんことを言うた時には、訳の分からん者に会うところからや。お釈迦様の本當の、阿弥陀如来の本願の教えに遇つて、さつきから言つているように、自分には光明無量としてはたらく教えに遇つたと、それによつて相対分別、比べるということを自分は超えた。要するに「私は、私でよかつたと言える者になつた」と。「そうなつたのはあなたが如来だからだ」と。「人間を超えているからだ」と。「その如来だという意味を私は五つで褒めます」と言つて褒めたのが五徳瑞現。分かる、言つていること。

(質問者一)「はい分かりますけど、ちよつと後がしゃべりにくい答えなので(笑)。いや、でも皆様の理解の役に立ちましたでしょうか。」

(先生) だからそれは『大経』の教えで言えば、「十二光」に相当する。阿弥陀如来は無量光である。阿弥陀如来は無辺光である。あるいは阿弥陀如来の智慧の光は、月や太陽の光は影を作るけど、それを超えた無明の闇まで届く超日月光であると、こういうふう十二光を褒めますね。十二光というのが『大経』の中に出てくるでしょう。あれには単なる言葉をだらだら述べてるんじゃないやなくて、ちゃんと意味がある。如来のはたらきを十二に述べている。その中の五つを取つて、阿難が自分の感動として五徳瑞現を述べたのです。

ですから親鸞聖人もやつぱり『大経』によつて救われていつたわけですからね。ですから最後には、自分も阿難と同じように救われたのだという感動をちゃんと自分の言葉で述べないと、無責任きわまりない話になりますからね。だから最後には、私も阿難と同じように、私が救われた感動を述べますと、「一乗究竟」やと。つまり「平

等」ということを教えられた。それから「時機純熟」やと。この五濁の世で私のような凡夫でも救われた。それが私にとつての救いですというふうには、五つ最後に述べて終わって行くわけです。実に凄いことやと思いませんか。

(質問者一)「ありがとうございます」

(質問者二)「阿難が「光顔魏魏」と言われた、その前段階が私はあると思つて、要するに阿難が凡夫と言うところに着地したことがまずあつて、だからこそ、その「光顔魏魏」ということが出て来るといふ、そこは書かれてないのですが、絶対まずそれがあるのじゃないかと思うのですけど。いかがでしょうか」

(先生) それはね、仏道に遇う時には、今日申しあげましたように「光に遇う」と。教えが光になるといふことは、こちらが闇だといふことがあるからです。こちらが闇だといふことがなければ光に遇ふ必要はありません。だからこの世で、うまく事柄が運んでいるとか、あるいはまあ、あらゆることに成功してよくできるセレブ達、そういう人達には仏教はいらない。ただそういう人たちでも死にますから、死ぬときに慌てて金を出すから臓器移植してくれと言つても、それはするかもしらんけど、しても死ぬ。さあどうするか。それは大問題やわね。

そんなふうには仏道の教えに遇う時にボーとしていて遇えるはずがない。こちらにやつぱり、闇だとか、地獄だとか、苦しいとか、なんやとか、なんでこんな目に遭わなあかんのかとか、やつぱり思うことがいっぱいある。そういう苦勞が、やがて時機を得て、お釈迦様の教えがやつと光として届いたところから『大経』は始まります。

だから『大経』はいきなり「光顔魏魏」と言うところから始まるから、「へー」と思ふかもしらんけど、恐らく阿難は悩んだと思ひます。従弟で、そしてお釈迦様のお世話を、もう常隨昵近、ずっと世話をしている。その一番近い阿難が最後まで覚りが悟れない。それはたぶん仲間たちから「あいつは馬鹿か」と言われているわけです。だからものすごく劣等感にも悩んだろうし、苦しんだと思ひますね。そういう中で、やがて「ああ凡夫でよかつたんや」と。「覚りを悟らんでもよかつたんや」といふ教えに、だから遇えた。

それは、『大経』は阿難が「光顔魏魏」といふふうには叫ぶところから始まつてますから、阿難の苦勞は書かれていません。その代わり『教行信証』をよく読むと、「信の巻」に阿闍世(あじゃせ)の『涅槃經』が長く引用されます。

この阿闍世の『涅槃經』というのは皆さん分かりますね。阿闍世が自分の父親を殺す。そして自分が王様になる。母親を幽閉して殺しかける。これは、インドの王様はみんなそういうことをして王様になつてから、特に悪いわけじゃないんです。それは国家を守つていこうとするときのある種の手段であつたわけで。ところが人間としてはナイーブな阿闍世が、やつぱり父親を殺すということが許せなくて、肌が割れて膿が出て自分の体が腐っていくと。なんでこんな苦しみをするんだと言つて「六師外道」に聞きます。

六師外道というのは世間の考え方です。自己肯定の考え方。分かるでしょう。テレビ観てたら全部自己肯定と自己保身ばかりでしょう(笑)。嘘をついてまで自己保身をする。あれが人間の本性です。その自己肯定の教えを六師外道から聞くのですが、それでは救われないわけです。それで耆婆きばというお医者さんがね、ちょうど田畑先生みたいな人です。「六師外道ではだめだ」と。「すばらしい大医

王がおるからそれに遇いなさい」と言つて連れていくのです。そして、行つたら、お釈迦様が月の光の中で座禅を組んでいる。ものすごくきれいなね。それを見て阿闍世は「光明無量・寿命無量」と叫ぶのです。阿難と同じことを言うのです。だから阿闍世が「月愛三昧」と、こういうのも象徴的にそう言っているものであつて、あれは、実は「本願の教え」を聞いたのだと。そして「光明無量・寿命無量」と叫んだのだというふうに読むのが親鸞聖人です。

ですから阿難の苦勞は『大經』にないために、『教行信証』全体を読むと、「信の巻」に『涅槃經』の阿闍世の苦勞が、つまり皆さんがこれから苦勞して、いや、もう苦勞して遇うた人もたくさんおると思うけど、苦勞して仏法に遇うということはどういうことかということが、事細かにずつと説かれていくのが阿闍世の『涅槃經』（阿難の苦勞、皆さんの苦勞）だというふうに考えたらちようどいいかなと思います。以上です。

あの、くどくど言わんでも分かるでしょう。皆さんが例えばいやなことに遭うて、夜寝れんことがあるでしょう。僕は毎日そうや。やつぱり死ぬ間際になると閻魔様のところに連れていかれるというけど、本当そうやわ。若い時に悪いことをしたことばかり思い出してね、「あの時あんなことをしなければよかった」とか、「あんなことを言わなければよかった」とか。僕は仏教に一生懸命に生きてつもりなんやけど、「あの時あの人にあんなことを言うて、ああかわいそうなことをした」とか、いろんなことを思う。けど、その時にやつぱり最終的には「まあ、しょうがないわ」と思つて、結局自己肯定というか、「まあ、俺も出来が悪いし、しょうがないな」と思つて自己肯定の教えに立つて、何となく慰めようとするのやけど、それではなかなか慰められんよ。やつぱり「なんかあかんア」と思つて、そ

して、やつぱり親鸞聖人やつたらどう言うかなと思つて、教えをまた聞き返すのよ。その時に、「虚仮不実である」と。自分を立てたいという根性が地獄を作つていられるのだと言われて、ああ私は本当に情けないと思う。

そういう心の動きがね、例えば六師外道、自己肯定の教えに遇うて、一時気がまぎれる。それで救われたような気もする。ところが時間が経つと何にも救われていない。さてどうするか。膿が流れてどうにもならない、お釈迦様のところに行く。そうしたらね、面白いよ。仏教の教えに遇うということは体の方が先に治る。膿が止まる。根性の方が治らない、なかなか。それを聞法しているのよ。この根性は治らないのは何でやろう、と言つて「往生の生活」があるのです。体の方が先に治るんだ。「行」の方が先にあるんだ。行動の方が。「信」じゃない。

「信」というのは分かる？ 考えるというんじゃない。阿闍世はこの身の方が先に治る。そしてそこからこのゆがんだ心を治していこうと。それは一生続く。言つてること分かりますね。仏教というものはそういうものよ。身の方が先に治る。けど根性だけは死ぬまで治らない。それを教えに聞いて行きなさい。これが大事なところかもしれないね。

阿闍世の物語をよく読んでみると、そういうことがよく分かるのです。ああ阿闍世は膿が止まった、先に。ところが曲がった根性は治らないと、「お釈迦様これを何とかしてくれ」と言つて、お釈迦様に聞法するのです。面白いでしょう。だから、「教・信・行・証」じゃなくて、「教・行・信・証」となっている。そこは大事なことよ。難しいですか、難しくてもいい、本当のことを言っているから、必ず分かる。

(質問者三)「単純な質問でおかしいかもしれませんが、阿難は「五徳瑞現」を感じることによって「覺りを悟った」のではないかと思うのですけど、それは阿難が「未離欲の仏弟子」ということで、ずつと言われてますけど、その時点で「信心を得た」というか、「覺りを悟った」のではないかなと思うのですがどうでしょう。」

(先生)そこはなかなか難しいところだね、おっしゃるように聖道門と同じように、生死・凡夫の身そのまま一如の覺りの世界にある、「生死即涅槃」ということを知ることができます。そういう意味では聖道門の覺りと同じ体験をしたと言えます。

ただし、そう言うと、そしたら自力の修行と一緒じゃないかと。自力の修行の覺りを、修行もしないで悟ったと、泥棒みたいな話じゃないかということになる。だから、親鸞聖人は「覺りを悟った」ということは絶対に言いません。それは「信心によつて、本願の方から生死即涅槃という仏様の覺りをいただいた」と。身は凡夫である。覺りを悟ったわけじゃないけど、身は凡夫だから、「一如の悟りの中に包まれた」と。「凡夫のままに包まれた」。だから海のような大宝海、「大般涅槃の海のような大宝海に包まれた」という表現を何度もしています。

それはあなたがおっしゃるように聖道門の覺りと同じことを言ってるんだけど、言い方が違つて、覺りを悟ったんじゃないと。凡夫のまま、実は分別が破られたときに、もともと一如だったんだと。もともと赤ちゃんの時、一如だった。分別がない時は他人も自分もないし、もともと一如の世界が本当なのだ。その一如の世界に分別が破られて今あると。そういう言い方をするのが浄土教です。

つまり「覺りに包まれた」「他力の本願に依つて覺りに包まれた」

という言い方をすると覚えておいてください。そうじゃなくて、「自力の修行によつて覺りを悟る」というのが聖道門です。それは言い方が違うけど、同じことを言っていると考えて結構です。

いいでしょうか。そこは大事なところです。だから親鸞聖人は必ず「海のような」とか、「大宝海に包まれた」と。「凡夫のまま」もともとあつた一如の世界に今、目が開かれた。それは相対分別を破るような教えに遇うたから、今一如の世界の中にあるのだという感動を述べるわけです。それはあなたがおっしゃるように聖道門では「ざとり」というのです。ところが浄土門では「他力の信心」と言います。同じことをね。だから「惑染の凡夫が信心を發すれば、生死即涅槃を証知する」。「信心によつて生死即涅槃を証知する」。こういうふうに表現します。その場合は、悟るということと決定的に違うのだということを親鸞聖人ははっきり分けています。そこが大事です。同じことだから一緒でしょうというのは観念であつて、考えたらそうなるのであつて、実際はそうならないと思います。

(質問者四)今言われた「一如宝海」その世界が浄土と考えてよろしいのでしょうか。

(先生)はい。それがまたややこしいところで、あのね、あなたなら分かるかもしれないが「一如法身」というのは、これは親鸞聖人が言うように「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかればころもおよばれず。ことばもたえたり」と書いてますよね。ですから、今言う「一如」とか「覺り」、「真理そのもの」は言葉では表せないのよ。むしろ言葉が破られて、もう世界とひとつになつちやたみたいな世界だから、それは言葉では表現できない、言葉を超えている。

ところが「言葉を超えている世界こそあなたの世界です」といく

ら言っても、それ言われたらそうかもしらんけど、何のことか分からんから、お釈迦様は苦勞したわけよ。「言葉を超えた世界」をどう表現するか、それが浄土です。だから浄土の一番の根源は「涅槃」。言葉を超えている。ところがそれでは人間に分らないから、言葉によつて、「いやいや、浄土というのはな、生まれていつたらいとこやぞと。全部食い物はあるよと。それから、欲しいものはみんな空から降つて来るよと。ルイビトンにしるジャガーにしる、どんどん降つて来るよ」と。自分が好きな物をみんな言うてるけど（笑）。そうすると、「いいとこやな、俺行こう」と思うでしょう。「おお浄土はいいとこや、行こう」と思うでしょう。まずその、思わせるという。憧れさせて思わせる。本人は大まじめに、「自分は仏教の覺りを求めているのだ。だから浄土に生まれたいのだ」と言うかもしれないけど、よく聞いてみると、ルイビトンが欲しかったり、ジャガーが欲しかったり、もうちよつと楽になりたいとか、もうちよつと何か晴ればれ生きたいとか、そんなことや。「それは仏教を求める心ではなくて、あなたの欲ですよ」ということを教えるために、浄土が説かれます。だから浄土は「憧れさせる」。「求めさせる」。本気で求める。ところが求めれば求めるほど、韋提希は浄土が説かれて、「私は浄土に生まれていきたい！」と叫ぶわけですよ。ところがお釈迦様は韋提希に「そうか、お前よく手を見なさい」と。「浄土はものすごく清らかな世界なのです。お前みたいな汚れた手でつかんだら汚れるじゃないか」と言つて、汚れた手を教える。その時にはじめて、「人間には仏教はいらない」と、初めて今度はこの世と一つになる。そして浄土を介して一如の世界に返されていく。そんな説き方になっています。

ですから、「浄土」の根は「涅槃」ですから、今度は逆に、「往生浄

土」ということが大切になる場面があります。今、私がしゃべっているのは「一心帰命」という、仏様に帰命する、初めて仏様に出遇うという時の話をしています。ところが出遇つた者は、さつき言つたように根性が曲がついているから、最後まで人間の根性を生きていなくてはならん。その時に役に立つのが浄土です。

浄土は、お前みたいに食い物ばかり求めて、今のテレビ観たら、なんかコロナと食い物しかやってないよ、あれは（笑）。あんなことしたら病気になる。浄土は「仏教を食べて生きていく」んやと。ね。そして、「禪三昧為食」と出てきます。そして「本願をいのちとする場所」なのだ。だからこの世で生きていく時に、コロナを一生懸命みんな避けてるけど、あれ糖尿病で死ぬぞ、今度は食い過ぎて（笑）。そんな話になる。だからそうじゃないと。「この世を超えなさい」と言っているんだと。

それはまず「仏教を食物にしなさい。そして本願をいのちとしなさい。そこに本當の意味で健康に生きていく人生があるのだ」というふうには、「浄土の方が今度は私たちの在り方を照らしてください」という意味を持つ。それが「願生浄土」・「往生浄土」という場面です。だから浄土が方便として説かれる「一心帰命」の場面と、浄土が本當の意味を持つて説かれる「願生」とか「往生」という場面を分けて考えなければいけない。それを混同すると分からなくなります。それであなたが聞きしたことから言うと、浄土は、浄土の根源は、「言葉を超えた覺り」です。ですから親鸞聖人は「往生浄土」、「願生浄土」という、浄土に向かつて行く歩みを、「涅槃に向かう歩みなのだ」と言い換えていつた訳です。分かりますね、そんなことだと思います。

（質問者四）ありがとうございます。（終了）

文責は編集者の田畑正久にあります。